The Acquisition of Nominative Case Marking in L2 Japanese: A Corpus Study

L2 日本語の主格標示の獲得：発話コーパス研究

Miyuki Noji　　Joetsu University of Education
野地 美幸　　上越教育大学

Abstract

This study investigates how L2 learners of Japanese with different L1 backgrounds (Korean, English, or Chinese) acquire nominative Case marking in Japanese. Analyses of data from a speaking corpus show that the nominative Case marking was almost perfect, incorrect Case marking being quite limited, throughout the entire stages examined in this study, irrespective of the learner's L1 backgrounds. On the other hand, some L1 effects were observed from early stages especially in terms of the nominative Case marking on the object of nominative object constructions. These findings suggest not only that the functional category of T is present in early L2 grammar, but also that its source is L1. Another important finding is that L1 English learners of L2 Japanese, like Japanese monolingual children, overgenerated the nominative *ga* for the accusative *o* in the course of the acquisition of nominative object constructions, which suggests a parameter resetting. Thus the Full Transfer/Full Access hypothesis (Schwartz & Sprouse, 1994) rather than the Minimal Tree hypothesis (Vainikka & Young-Sholten, 1994) or Full Access (Epstein, Flynn, & Martohardjono, 1996) is supported.

要旨

本研究は，類型的に異なる L1 背景を持つ（L1 韓国語・英語・中国語の）L2 日本語学習者が日本語の主格標示をどのように獲得するのかを調べている．発話コーパス資料の分析の結果，日本語の主格標示の獲得の過程においては，一貫してどの学習者群も主格標示はほぼ完璧で，格の誤りは極めて限定的であった．また，特に主格目的語構文の目的語への主格標示に関しては獲得の早い段階から L1 の影響が見られた．こうした発見は，早期 L2 文法における機能範疇 T の存在を示唆するだけでなく，それが L1 からの転移によるものであることを示唆している．もう一つの重要な発見は L1 英語の日本語学習者が日本語児と同様に主格目的語構文の獲得過程において「を」であるべきところで「が」を過剰生成したことであり，これはパラメターの再設定を示唆する．したがって，最小構造（Minimal Trees）仮説（Vainikka & Young-Sholten, 1994）や完全アクセス（Full

Access) 仮説 (Epstein，Flynn & Martohardjono，1996) ではなく，むしろ完全転移・完全アクセス (Full Transfer/Full Access) 仮説 (Schwartz & Sprouse，1994) が支持される．

1　はじめに

機能範疇が L2 の獲得初期段階 (initial stage) から存在するのかどうかという問題はこれまで多くの議論がなされてきた. Vainikka & Young-Sholten (1994，1996a，b) は，初期段階では構造上語彙範疇しか存在せず，機能範疇はインプットを基に発達が進むに従って徐々に獲得されるという最小構造 (以下 MT) 仮説を提唱し，Vainikka & Young-Sholten (2006) でも L2 の機能範疇の獲得に L1 が介在することに依然として否定的な見方をしている．一方，機能範疇も最初から利用可能であるとする立場もある．後者には (i) L1 からの転移により存在するという立場 (Schwartz & Sprouse (1994，1996) 等の完全転移・完全アクセス (以下 FTFA) 仮説) と[1]，(ii) (L1 からの転移によるのではなく) 普遍文法 (Universal Grammar，以下 UG) へのアクセスを通して利用可能であるという立場 (Epstein，et al. (1996) の完全アクセス (以下 FA) 仮説) がある．

機能範疇 T は文の時制指定が行われる場所であるが，主格標示に深く関わっている (Chomsky，1995). そしてまた主格標示に関する言語間の違いに関してもパラメターとして機能していると言われている (Ura，2000). そこで本研究では，主格標示に関して類型的に異なる L1 背景を持つ L2 日本語学習者の主格標示の獲得がどのように進むのかを明らかにすることにより，(i) T は獲得の早い段階から構造上存在するのか，そしてまた (ii) 存在するとしたら由来はどこか，つまり，L1 からの転移によるものなのか，あるいは UG の語彙目録から得られるものなのか，という問題に迫りたい．

2　主格標示に関わる言語類型論的差異

2.1 主格標示される要素

主格が文中のどういった要素に標示されるのかについては言語毎に違いがある．英語，日本語，韓国語はいずれも主格対格言語であるが，英語では主格標示される要素が主語に限定されるのに対して，日本語や韓国語では本来の主語以外の要素も主格標示され得る．

(1a)，(1b) はそれぞれ日本語の主格目的語構文，多重主語構文である. (1a) では主語に加えて目的語も主格標示されている[2]. (1b) では意味上の (logical) 主語である「背が」に加えて (意味上の主語ではないが多重主格構文で「が」格として現れる) 大主語 (major subject)「お父さんが」も主格標示されている．

---

[1] Eubank (1993/1994) 等の不定値 (Valueless Features) 仮説もここに属するが，機能範疇も転移するが V 素性は活性化していないという完全転移・完全アクセス仮説との違いが本研究の議論とは関連しないので省略する．

[2] 主格目的語構文の主語は述語によっては与格になることもあり (Kuno，1973)，その場合は与格構文と呼ばれるが，本研究にとってその区別は重要な違いをもたらさないので主格目的語構文という用語のみを用いる．

(1) a. ジョンがお金が沢山ある（こと）.

b. お父さんが背が高い（こと）.

(2) a. John-i ton-i manh-ta.

John-Nom money-Nom a lot-Dec

b. Apenim-i khi-ka ku-si-ta.

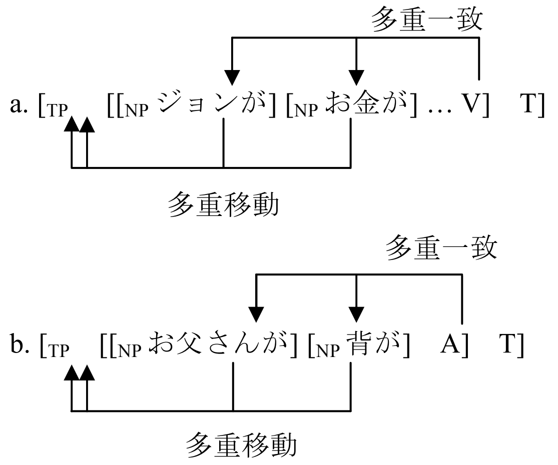
father-Nom height-Nom tall-Hon-Dec

(2) は (1) に対応する韓国語の主格目的語構文と多重主語構文であり，日本語と同様に本来の主語ばかりでなく目的語，大主語への主格標示が可能であることを示している.

主格目的語は，主格主語と同様に，T が格照合を行うとされている (Koizumi，1994，2008). (1), (2)のように本来の主語以外の名詞句にも主格が可能なのは，日本語や韓国語の T は英語の T とは異なり多重素性照合が可能であるからである (Ura，2000). 最近のミニマリストプログラム (Chomsky，2000，2001) の中で，この多重素性照合は複数回起こる操作としてではなく，多重一致 (Multiple Agree) という単一の操作として同時に (simultaneously) 起こるとされている (Hiraiwa, 2001).

ではここで (1) の文がどのように派生されるのかを見てみよう.

(3)



まず T が併合 (Merge) により構造に導入された段階で，その c 統御領域内にある二つの名詞句と同時に一致し，格が照合される. そして，その二つの名詞句は T の EPP 素性を満足させるために更に T の指定部へ同時に移動する. これは，移動 (Move) もまた多重に，そして同時に，単一の操作として起こり得るという Hiraiwa (2001) の分析に基づくものである. このように，主格目的語の「お金が」も大主語の「お父さんが」も，T が本来の主語名詞句と同時に多重一致 (すなわち多重主格照合)を成立させることにより主格，即ち「が」格が標示されることになる.

ただし，日本語や韓国語で本来の主語以外の要素への主格標示が常に可能であるというわけで

はない．述語が一定の状態述語を含んでいなければならない．日本語の目的語への「が」格標示を例に詳しく見てみると，時制文の主語は述語が (4a) のように非状態述語であれ (4b) のように状態述語であれ主格標示され得る．これに対して，目的語が主格となるのは (4b) のように状態述語が用いられている場合のみである．

(4) a. 和子が{バイオリンを， *バイオリンが}弾く．
b. 和子が{*バイオリンを，バイオリンが}得意だ．
c. 和子が{バイオリンを，バイオリンが}弾ける．
d. 和子が{バイオリンを， *バイオリンが}弾きうる．

また，「弾く」のような非状態述語も (4c) の「弾ける」ように可能の-e のような状態述語が付けば主格目的語も可能となる．しかしながら，(4d) の「弾きうる」ように状態述語であっても-u の場合目的語は主格標示されない (Tada (1992) 等)．したがって，本来の主語への主格照合は述語の状態性とは無関係に T によって行われるが，本来の主語以外の要素に対する主格照合に関しては，T が多重格照合可能であることに加えて，T と一定の状態述語との間の選択制限も満たされていなければならない．

2.2 格の形態的具現

名詞句に標示される主格がどのように形態上具現されるのかに関しても言語毎に違いが存在する．英語は代名詞においてのみ格の区別が形態上存在するが，日本語は代名詞に限らず名詞句であれば格が形態的に具現され，格助詞「が」が付く (5a)．しかしながら「が」は随意的で，口語ではしばしば脱落する (5b)．そしてまた「は」や「も」といった他の助詞が付く場合，抽象的には主格であっても，「が」として具現されることはない (5c)．

(5) a. {私が，和夫が}先に行きます．
b. 私，先に行きます．
c. {私は，私も}先に行きます．

「は」のような副助詞もまた脱落しうるので，(5b) の「私」は実際には「は」の脱落の結果と解釈することも可能である．ただし，抽象格が主格であることに変わりはない．

韓国語は日本語と同様のパターンを示し，「が」「は」「も」に対応する助詞 (それぞれ ka (가)・i (이)， nun (는)・un (은)，to (도)) が存在する．一方，中国語は，抽象的レベルで英語と同様に主格標示はあるとされるが (Li, 1990)，形態的には具現されない．

主格標示に関する言語毎の違いをまとめると表 1 のようになる．

表1.　主格照合に関する言語類型論的違い

	T	主格標示される要素	NPの格の形態的具現
日本語，韓国語等	［＋多重格照合］	本来の主語，大主語，目的語	有（随意的）
英語，中国語等	［－多重格照合］	本来の主語	英語は一部（代名詞）に有，中国語は無

T の [±多重格照合] 素性は語彙情報として辞書に収められている情報であるが，TP の指定部 (指定部が複数ある場合にはその内側の指定部) に現れる本来の主語以外の要素 ((1a, 2a) の目的語， (1b，2b) の大主語) への主格標示を許すかどうかという言語類型論的違いをもたらすパラメターとして機能している. T が [+多重格照合] 素性を持つ日本語と韓国語は, T の選択特性も絡んで一定の状態述語が用いられた場合に主格目的語構文，多重主語構文が可能となる．しかし，T が多重主格照合を行わない ([+多重格照合] 素性を持たない) 英語と中国語では本来の主語以外の要素が主格となることはない.

また，名詞句の格の形態的具現に関する違いとしては，名詞句が格の違いに応じて形態を変化させるかどうか，そして (変化させるとしたら) どのような名詞句がどういった方法 (補充法あるいは助詞や接辞の付加) によりどういった形態に変化するのか，が問題となる．抽象的格システム自体はどの言語も類似しているとされる一方で，表 1 のような言語毎の格の形態的具現の違いは PF への写像に大きく関わるとされている (Chomsky，1995: 26).

3　先行研究

3.1 L2

機能範疇 T が獲得の早い段階で存在することを示した研究とし Haznedar (2001) と Ionin & Wexler (2002) の子どもの L2 英語の研究がある．彼女達は，T が仲立ちとなって主語との間で成立すると考えられている動詞の屈折 (inflection) 語尾の産出に関して，主語が三人称であるのに-s を欠くといった屈折語尾の脱落 (omission) は多く見られたが，主語が二人称であるのに動詞に-s が付くといった明らかな誤用 (incorrect use, 以下単に「誤用」) はほとんど見られなかった (-s は 5%, -ed は 0%)と報告している．この事実は，T とそこに含まれる一致素性や時制素性が構造上存在しない, あるいは不全 (impaired) であるとすると説明できないという理由で T は健全な形で構造上存在すると主張している．一方，脱落エラーに関しては一致素性や時制素性といった屈折に関わる抽象的な素性を形態的に具現する際に起こる表面的な問題であろうとして，Prévost & White (2000) の表面的屈折欠如仮説 (Missing Surface Inflection Hypothesis) を擁護する立場を取っている.

主格標示もまた T とそれに含まれる素性の存在・健全性を確かめるもう一つの手段となりうる

ものである. Lardier (1998) は安定状態にある大人の L2 英語を，Haznedar (2001) は獲得早期の子どもの L2 英語を，縦断的に調べ，彼らの産出資料には誤った主格標示 (すなわち，主格となるべきところで対格が使用されるといった誤り) がそれぞれ 0%，0.06%とほとんど存在しなかったと報告している (Ionin & Wexler (2002: note 7); Yoshimura & Nakayama (2009) も参照). この，主格標示が (ほぼ) 完璧であるという事実は，T とその内部の素性が構造上存在し，主格照合を適切に行っていることを示唆している.

このように，先行研究では子ども・大人の L2 学習者の産出する屈折や格助詞の誤用は，脱落とは異なり，機能範疇とその内部の素性の存在と密接にかかわっていることが明らかになっており，正用の割合が高いことが T の存在・健全性を示唆する経験的証拠とされてきた. しかしながら，問題も残されている. 先行研究では L2 英語を対象としたものが多く，英語より複雑な主格標示システムを持つ L2 日本語についても T そしてその内部の素性が存在すると言えるかどうかは不明である. また，早い段階で T が存在するとしてその由来 (L1 からの転移によるものなのか，それとも UG の語彙目録に由来するものなのか) も不明である.

L2 日本語の主格標示に関しては，正用率を基に目的語の「が」は他の「が」より易しいとされ (先行研究に関しては坂本 (1997) を参照)，(6) のような格助詞の誤用に関しては L1 との比較を通して L1 が影響している可能性も指摘されている (森山，2005).

(6) 英語をできる.

(6) の文は韓国人日本語学習者が指定された動詞を使って絵を口頭で説明する課題に取り組んだ際に発したものである. 「できる」は韓国語では対格目的語と共起する述語に対応し，その影響で「を」が誤って使用された可能性があるという.

しかしながら，森山 (2005) も指摘する通り，L1 が韓国語以外であっても (6) のような誤用はあり, どこまでが L1 の影響なのか定かではない. L1 の影響についてより確かな証拠を得るためには，主格標示に関して類型的に異なる L1 背景を持つ日本語学習者から得られた資料を基に L2 主格標示の獲得に違いがあるかを調べる必要がある (Schwartz & Sprouse (1996，2000); White (2003: 63) を参照).

そこで本研究では，主格標示に類型的違いのある L1 背景を持つ複数の学習者群からの産出資料を基に，L2 日本語の主格標示の獲得の過程で正・誤用等がどの程度見られるのか，L1 が異なると発達の道筋も異なるのかを明らかにすることにより，上で述べた T とその素性の存在・健全性，そしてまた T の由来について答えを導き出したい.

3.2 L1

L2 日本語の主格標示の獲得過程を調べるにあたって，日本語児が L1 日本語の格助詞獲得の過程でどのような誤りを産出するのかを見ておく必要がある.

日本語の助詞の発達段階について，横山 (2008) は，まったく助詞が使えない段階 (第一段階) から限られた発話の中で助詞が正しく使える段階 (第二段階) を迎え，正用だけでなくしきりと誤用も行う段階 (第三段階) が訪れると述べている．

「が」格と「を」格に関しては，鈴木 (2007) が先行研究を概観し，1 歳児から産出が報告されているが，直接目的語に対して主格の「が」を使用する誤りが最も頻繁に起こる誤用であり，研究によって頻度にかなり差は見られるが 5，6 歳児でもそのような誤用が報告されていると述べている．

また，横山 (2008) は，横山 (1991) の研究をもとに，(i)「を」を「が」にする誤用と「が」を「を」にする誤用を比べると後者は前者の 2.6%と少なく偏りがあった．さらに (ii) この「を」を「が」にする誤用は目的語「が」格表示 (正用) が顕著に現れてからよく産出されたと報告している．この事実は，この誤用が単なる「が」と「を」の混同によって生ずるものではなく，主格目的語構文の獲得に絡んで生じていること，言い換えると，T のパラメター ([±多重格照合]) の値の設定に関わって生じている誤用である可能性を示唆している．

格助詞の誤用の説明に関連してもう一つ重要なことは，Morikawa (2006) も指摘しているように，誤用が常に正用と同時に起こっており，通常頻度では正用が誤用を上回っているという事実である．

L1 日本語の主格標示の獲得に関連して先行研究で明らかになっていることをまとめると次のようになる．日本語児は最初格助詞を落してしまうが，次第に産出できるようになり，やがて誤用も産出するようになる．誤用のうち目的語の「を」を「が」にしてしまう誤用がとりわけ多く，この「が」の過剰生成は主格目的語構文獲得の時期と合致する．しかしながら，誤用は常に正用を上回る頻度で起こることはない．

4　予測

本節では，2，3 節の内容を踏まえ，MT 仮説，FTFA 仮説そして FA 仮説が L2 日本語における主格標示の獲得に関してどのような予測をするのかを見ていく．

まず，この 3 つの仮説は L1 の影響に関して異なる予測をする．MT 仮説と FA 仮説は L1 の影響は見られないことを予測するのに対して，FTFA 仮説は，L1 からの転移により最初から T と T 内の主格照合に関わる素性は利用可能となっているという想定なので，主格標示の獲得に関しても L1 が異なれば発達の道筋も異なることを予測する．

具体的には，主格標示に関して日本語とタイプの同じ韓国語のような言語を L1 とする学習者群の L2 日本語には [+多重格照合] 素性を持った T が最初から存在している，そしてまたこの T は一定の状態述語との間で選択制限を成立させており (L1 と L2 で異なる部分はあるにせよ) この選択特性も含んでいると考えられる．したがって，日本語とタイプの異なる L1 英語・中国語の日本語学習者と比べて目的語や大主語への主格標示 (正用) が容易であり，こうした要素に対す

る主格標示の産出時期も早く，頻度も高いことを，そして使用される状態述語の種類も豊富なことを，予測する.

また，最初は [－多重格照合] 素性を持つ (FTFA 仮説のうちの FT 仮説の予測) L1 英語・中国語学習者は，獲得の途中でそれと矛盾するインプット (主格の目的語や大主語が含まれる文) に出くわすので，UG によって可能とされている範囲で再構成 (restructuring)，すなわち [+多重格照合] へのパラメター再設定 (resetting) も起こるだろう (FTFA 仮説のうちの FA 仮説の予測). したがって，この再設定に伴い，L1 日本語の主格目的語構文の獲得において観察されているような，本来「を」格となるべき目的語に対する誤った主格標示が見られる可能性もある.

FTFA 仮説は，「が」格の形態的具現に関しても，例えば L1 が格を形態的に具現する言語かどうかで L2 日本語の格の形態的具現の頻度も異なることを予測する. ただし，これは主格の「が」に限定されることはないはずである.

では, MT 仮説と FA 仮説の予測について見ていこう. この 2 つの仮説は機能範疇 T が関わるとされる主格標示に関しては L1 獲得と同様に進むことを予測する. つまり，最初は「が」格が現れず (脱落)，主格目的語構文の獲得の際に目的語への誤った主格標示も見られるはずであるが，誤用が正用を上回ることはない. また，L1 の影響は見られないはずなので，上で述べた L1 韓国語群と L1 英語・中国語群との間の違いも見られないはずである.

5　L2 主格標示の獲得

5.1 コーパスの概要と調査対象者

本研究では，カッケンブッシュ他 (1996-1998)[3]により収集された KY コーパス (Kamada & Yamauchi corpus) に収録されている発話資料を調べた. KY コーパスは全米外国語教育協会 (American Council on Teaching of Foreign Languages; ACTFL) が開発した OPI (oral proficiency interview) を基に作成され，1 人当たりの面接時間は 20-30 分，内容は「1. 導入部」「2. 中級のレベルチェック」「3. 上級の突き上げ」(中級以上の学習者)「4. 終結部」で構成され，面接結果を基に 9 段階 (初級 (上・中・下)，中級 (上・中・下)，上級 (上級上・上級)，超級) の能力判定が付いている (コーパスの詳細に関しては鎌田 (2006) を参照).

本研究では，大人の日本語学習者 75 名 (L1 韓国語・L1 英語・L1 中国語学習者それぞれ初級 5 名，中級 10 名，上級 10 名) の全発話を調査の対象とした.

5.2 資料の分析手順

日本語は主語も目的語も空になりうる言語であるが (最近の研究としては Takahashi (2008) を参照)，本研究では明示的 (overt) 名詞句のうち主語，大主語，そして (述語の) 直接目的語の格標示を調べた. 主格標示に関しては，(7)(=(1)) の「ジョンが」「背が」も含めて本来の主語を「主

[3] 平成 8－10 年度日本文部科学省科研プロジェクト基盤研究 (A) (1)『第 2 言語としての日本語の獲得に関する総合研究』課題番号：08308019，研究代表者：カッケンブッシュ寛子.

語」に，それ以外の主格標示されうる名詞句を「非主語」に便宜上分類した．後者は，具体的には主格目的語 ((7a)の「お金が」等) と大主語 ((7b)の「お父さんが」等) である．

(7) a. ジョンがお金が沢山ある(こと).
b. お父さんが背が高い(こと).

対格標示に関しては，述語の直接目的語を「目的語」として分類した．

さらに，「主語」と「非主語」の名詞句に関しては，(8a) のように正しく主格標示され「が」格として現れている場合 (「正」), (8b) のように誤った格標示がなされている場合 (「誤」), (8c) のように抽象的には主格標示されていると考えられるが「が」格が付いていない (文法的) 場合 (「無」), (8d) のように (格助詞ではなく) 「は」や「も」といった助詞が付いていて主格標示が明示されていない(文法的) 場合 (「他助詞」), に分類し，それぞれの数を求めた ((5)と比較参照).「目的語」もこれに準じで 4 分類した．

(8) a. はい，うーん，それが記憶に残っています.
b. それから，授業を，みんな終わると，午後 4 時になります.
c. 特に，魚とか，海のもの，少ないです.
d. 自動車は，あーだいじょうぶですけど…

この 4 分類の数の合計 (「計」) が，主格・対格標示が正しくあるいは間違って起こりうる (「正」あるいは「誤」が起こり得る) 全ての文脈の数に相当する．

ただし，名詞句に「が」格・「を」格が付いていても，対応する述語がない場合や，「気がする」「気が付く」のような慣用句の一部となっている場合，および面接者の発話のコピーと解釈できる場合は分析から除外した．また，主格・対格標示の正誤の判断に関しては，例えば話題の「は」が使用されるべき文脈で主格の「が」が使用されていても誤用とは見なさず，あくまでも (「が」と「に」, 「が」と「を」といった) 格助詞の間での誤用を問題とした [4].

構文毎に説明を補足する．まず，多重主語構文に関しては，便宜上，意味上の主語を「主語」, 大主語を「非主語」に分類したが, 「東京人口が多い」の「東京」のように大主語に助詞がない場合は「東京の人口」のような解釈も可能なため, 「非主語」の「無」に分類せず，分析から除外した．

また，主格目的語構文に関しては，主語を「主語」に目的語を「非主語」に分類したが, 「その本の表紙が面白い・恐ろしい」のように主格名詞句が主語なのか目的語なのか曖昧になる述語の場合 (Kuno (1973) を参照), (「私は」のように) 他に主語と解釈できる名詞句が明示的に存在

[4] 「が」と「は」の区別は談話的知識の獲得と関わり，L2 日本語学習者には困難であることが知られているが (Kuno, 1973: 37; 野田・迫田・渋谷・小林，2001: 第 7 章)，この問題はここでは扱わない．

し，主格名詞句が目的語であることが唯一的に決まる場合にのみ主格目的語と見なし，「非主語」の「正」に分類した．一方，そのような主語名詞句が存在しない場合，主格名詞句は「主語」に分類した．また，「わかる」「ほしい」といった一部の状態述語の目的語に関しては，主格標示以外に対格標示も文脈によっては可能であり状態性 (stativity) が異なる (Sugioka，1986; Koizumi，1994)，若い世代は可能である (久野，1973; Ura，2000)との指摘がある．そこで，そのような述語と共起している対格目的語の正誤の分類を行うに当たっては, (対格の部分のみを空欄にした) 穴埋め問題を別に作成し，日本人大学生 5 名に格助詞を入れてもらった．そしてその直後に，目的語に対格を付した文を示し，(「完全に容認不可能」から「完全に容認可能」までの) 5 段階尺度形式の容認性判断もしてもらった. 5 名中 4 名以上が「が」を入れ，容認性判断の平均が 2 (「どちらかと言えば容認不可能」) 以下のものを「誤」，この基準に合致しないものを「目的語」の「正」と見なした.

5.3 結果

調査対象とした日本語学習者のうち L1 中国語の日本語初級の 1 名は英語圏に住んでいることが判明した．英語の主格標示からの影響を考慮し，分析の対象から外した．またコーパスに収録されている日本語学習者のほとんど全てが大学や日本語学校等での学習によって日本語を習得した者であるとの説明がなされていたが，L1 英語の日本語学習者 (中級) のうち 1 名は日本生まれであることが判明したため，分析の対象外とした.

5.3.1 主格標示・対格標示の結果

初級・中級・上級の大人の日本語学習者 73 名の主格・対格標示の正誤等の分析結果は表 2 の通りである.

まず第一に，主格標示に関しては，どの熟達度のどの L1 群に関しても，「主語」の場合も「非主語」の場合も，正しい (すなわち「正」の) 主格標示がある程度見られた一方で，間違った格標示 (すなわち「誤」) の数はとても少なかった. 1×2 の直接確率計算法により正誤差の検定を行った．その結果，初級・中級・上級いずれも p =.00 (両側検定) であり，それぞれ「正」が「誤」より有意に多かった．また，韓国語・英語・中国語のいずれの L1 群も p =.00 (両側検定) であり，それぞれ「正」が「誤」より有意に多かった．そして「主語」も「非主語」も p =.00 (両側検定) であり，それぞれ「正」が「誤」より有意に多かった.

第二に，「非主語」の「正」の主格標示の数については，初級は全体の数が少なくはっきりしたことは言えないが (後で個人の結果を示す)，中級・上級で韓国語群がそれぞれ 74 (55%)，102 (65%) と多かった．中級・上級の「非主語」に関して，「誤」と「他助詞」のカテゴリーを合わせて 3×3 の χ^2 検定を行った結果, 数の偏りが有意であった (χ^2s(4)>22.24，ps<.01). 残差分析を行った結果，中級では韓国語群の「正」の数が有意に多く，中国語群の「正」の数が有意に少なか

った．上級では，韓国語群の「正」の数が有意に多く，英語群と中国語群の「正」の数が有意に少なかった．

第三に，初級と比べて主格目的語に対する「正」の主格標示の数 (表 2 のカッコ内の数字) が増えている．したがって主格目的語構文の獲得が加速していると考えられる．中級の学習者の「目的語」への対格標示について見てみると，「誤」の数が英語群 15 (9%)，中国語群 13 (4%)，韓国語群 5 (2%) の順に多かった．「目的語」の「誤」のうち「が」の誤用が最も多く，それぞれ 13，11，5 であった．「誤」の数をこの「が」の誤用に限定し中級の「目的語」に関して 3×4 の χ^2 検定を行った結果，数の偏りが有意であった(χ^2s(6)>105.44，ps<.01)．残差分析を行った結果，韓国語群の「誤」が有意に少なく，英語群の「誤」が有意に多かった．

表2. 主格・対格標示：正誤等の数とその割合

		主格標示										対格標示				
		主語					非主語					目的語				
熟達度	L1	正	誤	無	他助詞	計	正	誤	無	他助詞	計	正	誤	無	他助詞	計
初級	韓国語	17	0	7	18	42	7 (7)	0	0	1	8	10	1	3	0	14
	(n=5)	40%	0%	17%	43%	100%	88%	0%	0%	13%	100%	71%	7%	21%	0%	100%
	英語	3	0	26	17	46	4 (4)	0	4	6	14	9	4	9	4	26
	(n=5)	6%	0%	58%	35%	100%	29%	0%	29%	43%	100%	35%	15%	35%	15%	100%
	中国語	3	1	7	6	17	2 (2)	0	0	1	3	8	1	7	4	20
	(n=4)	18%	6%	41%	35%	100%	67%	0%	0%	33%	100%	40%	5%	35%	20%	100%
中級	韓国語	223	5	42	199	469	74(69)	2	21	38	135	218	5	58	20	301
	(n=10)	48%	1%	9%	42%	100%	55%	1%	16%	28%	100%	72%	2%	19%	7%	100%
	英語	73	0	31	153	257	43(41)	0	14	20	77	73	15	71	12	171
	(n=9)	28%	0%	12%	60%	100%	56%	0%	18%	26%	100%	43%	9%	42%	7%	100%
	中国語	62	4	166	300	532	38(38)	0	43	40	121	100	13	144	41	298
	(n=10)	12%	1%	31%	56%	100%	31%	0%	36%	33%	100%	34%	4%	48%	14%	100%
上級	韓国語	375	0	44	229	648	102(101)	0	22	33	157	254	1	97	34	386
	(n=10)	58%	0%	7%	35%	100%	65%	0%	14%	21%	100%	66%	0%	25%	9%	100%
	英語	306	2	58	336	702	39(35)	0	34	27	100	249	6	121	45	421
	(n=10)	44%	0%	8%	48%	100%	39%	0%	34%	27%	100%	59%	1%	29%	11%	100%
	中国語	232	6	154	411	803	29(27)	0	25	29	83	233	4	149	43	429
	(n=10)	29%	1%	19%	51%	100%	35%	0%	30%	35%	100%	54%	1%	35%	10%	100%

註: カッコ内の数字は主格目的語の数である.

最後に，格の形態的具現に関連する結果について述べる．中国語群の主格標示「無」の数が，中級では「主語」の場合 166 (31%)，「非主語」の場合 43 (36%)，「目的語」の場合 144 (48%) と多く，上級でも「主語」の場合 154 (19%)，「目的語」の場合 149 (35%) と多かった，中級・上級の「主語」「非主語」「目的語」に関して，「誤」と「他助詞」のカテゴリーを合わせて 3×3 の χ^2 検定を行った結果，数の偏りが有意であった (χ^2s(4)>12.79，*p*s<.05)．残差分析を行った結果，中国語群の主格標示「無」の数が，中級では「主語」「非主語」「目的語」の場合に，上級では「主語」「目的語」の場合に有意に多かった．

5.3.2 主格目的語構文で使用された述語に関する結果

「正」の主格標示が確認できた主格目的語構文に関しては，使用された述語についてさらに調べた．使用された述語の数 (延べ数ではなく，異なる述語の数)の平均及び標準偏差は表 3 の通りである．以下，個人の結果 (付録を参照) と合わせて報告する．

表 3. 主格目的語構文で使用された述語の数の平均 (標準偏差)

L1	初級	中級	上級
韓国語	1.40 (1.67)	3.10 (1.45)	4.90 (2.02)
英語	0.60 (0.89)	2.11 (1.17)	2.40 (1.26)
中国語	0.50 (1.00)	1.50 (1.27)	1.80 (1.48)

まず，初級はそもそも人数が限られており，「上級の突き上げ」の部分も含まれていないため，個人の結果に着目すると，興味深いことに，韓国語群の「非主語」の「正」の数 (7) のうち 4 は同一の学習者によるものであった．また，述語は全て異なるものが使用されていた．この学習者は初級 (上) の学習者であったが，(あくまでも偶然である可能性は否定できないにせよ) 初級の英語・中国語群にこのような学習者は含まれていなかった．また，仮にこの学習者が本来中級 (下) と見なされるべき学習者であったとすると (鎌田 (2006)を参照)，確かに数量的に 4 というのも考えられない数値ではないが，使用された 4 種類のうちの 2 つ (「困る」「難しい」) に関しては中級だけでなく上級の英語・中国語群による主格目的語構文での使用は見られなかった述語であった．

また，中級に関しても，韓国語群は主格目的語構文で多くの多様な述語を用いていた (平均述語数: 3.10; 新出述語数: 8) のに対して，英語・中国語群は述語の数の平均 (それぞれ 2.11，1.50) からすると初級より増えてはいるが，種類としてはあまり増えていなかった (新出述語数: 5 (英語群)，2 (中国語群))．英語・中国語群に特徴的なのは「見える」「読める」といった-e の付く複合動詞が新たに加わったことである．

上級に関しては，韓国語群では使用された述語の数の平均が 4.90，新出述語数が 10 と更に増加し，群全体として使用された述語の種類も増加した．これに対して英語・中国語群は使用された述語の数の平均もそれぞれ 2.40，1.80 と微増で，種類として増えたものは英語群で 3 (「売りたい」

「嫌い」「必要」)，中国語群で 2 (「得意」「いや」) に止まった.
本研究の結果をまとめると以下の通りとなる.

(9) a.「主語」も「非主語」も，また L1 を問わず，初級から「正」の主格標示がある程度見られた一方で「誤」の数は一貫してとても少なかった.

b. 非主語」の「正」の数は，中級，上級共に韓国語群で多く，他の L1 群では少なかった.

c. 主格目的語の「正」が増える中級では，英語群の「目的語」の「誤」(特に「が」の誤用) が多く，韓国語群では少なかった.

d. 中国語群の主格標示・対格標示に関しては「無」の数が特に中級で顕著に多く，上級でも割合は減るものの「主語」と「目的語」で多かった.

e. 主格目的語構文で使用された述語については，初級・中級・上級のいずれも韓国語群が他の L1 群と比べて多様であった.

6　議論と結論

機能範疇 T は主格名詞句の認可に関わるものであったが，L2 日本語でも獲得の早い段階から主格標示の正用の頻度が誤用を上回ったことは (9a)，Haznedar (2001) や Ionin & Wexler (2002) 等の L2 英語と同様 L2 日本語にも早い段階から T が構造上存在していることを示唆している.

また，この T の由来については，(9b)，(9d) の結果で示された L1 の影響が，T が L1 の特性を引き継いで早い段階から存在していることを示唆している. そしてまた，その最も自然な説明として，T が L1 からの転移により最初から存在していることを示唆している.

さらに，L2 日本語の主格標示の発達の途中で，([−多重主格照合] の言語を L1 とする) L1 英語群は主格目的語構文の獲得の際に直接目的語への「が」の誤用を多く産出するという L1 日本語獲得の場合と似た現象を示すことも明らかになった (9c). これは，L2 日本語で [−多重主格照合] から [＋多重主格照合] への再設定が起こりうることを示唆している. 今回の調査で (L1 が英語と同じ [−多重主格照合] の) L1 中国語群 (中級者) の「目的語」の「誤」の数は有意差を示さなかったが，数値的には L1 韓国語群より多く，ここで示した示唆と矛盾することはなさそうである. ただし，格が形態的に具現されない中国語のような言語の場合と，一部であれ格が形態的に具現され主格と対格が形態上区別される英語のような言語の場合とで事情が異なる可能性もある. 具体的には，L1 が中国語の場合 [＋多重主格照合] への再設定ではなく設定が行われるだけである可能性があり，これは今後の課題としたい.

格の形態的具現に関しては，(9d) の結果が得られたことにより，形態上格が具現されるかどうかの L1 の違いも発達の途中で顕著に表れる時期があることが明らかになった.

以上本研究で得られた結果が示唆する内容について個別に見てきたが，(9) の結果全体としては，FTFA 仮説の予測通り，L1 の影響と共に目標 L2 言語のパラメター値への再設定に関わっていると考えられる現象が確認されたことになる[5].

L2 獲得における L1 の影響に関しては，それを否定していない研究者が多い一方で，何が転移し，発達とどう関わるのかは不明な部分が多いとされているが (Whong-Barr, 2006)，本研究では T の [±多重格照合] 素性，述語との選択特性も L1 からの値を引き継いでいるとの示唆が得られた．したがって，L2 学習者は L1 のパラメターの値を持った状態で獲得を開始するとした White (1985) の立場に，そしてまた Schwartz & Sprouse (1994，1996，2000) 等の完全転移説に新たな支持を与えたことになる.

一方，パラメターの再設定の問題に関しては，本研究で L1 英語群に L1 獲得と同様の現象が確認されたことは厳密には [±多重格照合] 素性が再設定可能であるということと合致する結果ではあるが，本当に [±多重格照合] 素性がマイナスからプラスに再設定されるかどうかは定かではない．この問題は FA 仮説の検証にとって重要な問題であるが，Schwartz & Sprouse (2000) が述べているように，刺激の貧困 (poverty of stimulus) の問題と関連させ，UG を仮定しないと説明できない特性が見られるかどうかという観点からさらに検討していく必要がある (Belikova & White (2009)も参照)．したがって，このパラメターの再設定の問題は本研究を土台として今後追及されるべき重要な研究課題となるであろう.

[5] 1 名の査読者より，表 2 の「主語」への主格標示に関して初級の L1 英語群で「無」の数が多いことが FT では説明できない可能性があるとのご指摘を頂いた．「主語」への「が」格標示の獲得には，実際には「は」の獲得も深く関わっている．韓国語には日本語と同様に「が」と「は」の区別が存在するが，この区別が L1 に存在しない英語群と中国語群にとって「が」の獲得をより困難にしている可能性がある (注 4 も参照)．初級 L1 英語群と L1 中国語群の結果を比較してみると，どちらも一定の割合で「は」のような「他助詞」を用いており，「正」と比べて「無」が多くなる傾向も見受けられる．よって「主語」への主格標示に関しては，「無」の数だけを見ると一見確かに L1 英語群が他の群と異なるように見えるが，L1 中国語群と同じ特徴を有しており，FT と必ずしも矛盾するものではないと言えるであろう.

謝辞

まず，本研究に関して有益なコメントを寄せて下さった佐野哲也氏を始めとする TPL メンバーの方々，Dr. Bonnie D. Schwartz，査読者の方々に心より感謝申し上げる．コーパスについて情報を提供下さった菅野和江先生，山内博之先生にも厚く御礼申し上げる．本稿は 2013 年 9 月にハノイ国家大学外国語大学で開催された日越友好 40 周年記念「国際人材育成戦略における日本語・日本語教育及び日本学の研究」国際シンポジウムで行った研究発表を基にしたものである．発表の際に建設的な意見を下さった主催者，参加者の方々にも謝意を表したい．なお，本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 20520376，研究代表者: 野地美幸) の助成を受けて行われたものである．

文献

Belikova, A. & White, L. (2009). Evidence for the fundamental difference hypothesis or not?: Island constraints revisited. *Studies in Second Language Acquisition*, 31, 199-223.

Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program.* Cambridge, MA: MIT Press.

-----. (2000). Minimalist inquiries: The framework. In R. Martin, D. Michaels & J. Uriagereka (Eds.), *Step by Step: In Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.

-----. (2001). Derivation by phase. In M. Kenstowicz (Ed.), *Ken Hale: A Life in Language*,1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Epstein, S., Flynn, S. & Martohardjono, G. (1996). Second language acquisition: Theoretical and experimental issues in contemporary research. *Behavioral and Brain Sciences*, 19, 677-758.

Eubank, L. (1993/1994). On the transfer of parametric values in L2 development. *Language Acquisition*, 31, 183-208.

Haznedar, B. (2001). The acquisition of the IP system in child L2 English. *Studies in Second Language Acquisition*, 23, 1-39.

Hiraiwa, K. (2001). Multiple Agree and the defective intervention constraint in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics*, 40, 67-80.

Ionin, T. & Wexler, K. (2002). Why is 'is' easier than '-s'?: Acquisition of tense/agreement morphology by child second language learners of English. *Second Language Research*, 18, 95-136.

鎌田修 (2006). 「KY コーパスと日本語教育研究」『日本語教育』, 130, 42-51.

Koizumi, M. (1994). Nominative objects: The role of TP in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics*, 24, 211-230.

-----. (2008). Nominative object. In S. Miyagawa & M. Saito (Eds.), *The Oxford Handbook of Linguistics*, 141-164. Oxford: Oxford University Press.

Kuno, S. (1973). *The Structure of The Japanese Language.* Cambridge, MA: MIT Press.

Lardiere, D. (1998) Case and tense in the 'fossilized steady state. *Second Language Research*, 14, 1-26.

Li, Y.-H. A. (1990). *Order and Constituency in Mandarin Chinese.* Dordrecht: Kluwer.

Morikawa, H. (2006). The acquisition of case markers. In M. Nakayama, R. Mazuka & Y. Shirai (Eds.), *The Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese*, 76-81. Cambridge: Cambridge University Press.

森山新 (2005).「韓国語母語話者の格助詞習得に関する認知言語学的研究」『同日語文研究』, 20, 105-116.

野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001).『日本語学習者の文法習得』. 東京：大修館書店.

Prévost, P. & White, L. (2000). Missing surface inflection or impairment in second language acquisition?: Evidence from tense and agreement. *Second Language Research*, 16, 103-133.

坂本正 (1997).「第二言語習得と日本語研究: 助詞「は」と「が」について」真紀 ハバード・坂本正・ ジェームス デーヴィス (編)『日本語教育：異文化の懸け橋』, 175-189. 東京: アルク.

Schwartz, B. D. & Sprouse, R. A. (1994). Word order and nominative case in non-native language acquisition: A longitudinal study of (L1 Turkish) German interlanguage. In T. Hoekstra & B.D. Schwartz (Eds.), *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, 317-368. Amsterdam: John Benjamins.

-----. & -----. (1996). L2 cognitive states and the full transfer/full access model. *Second Language Research*, 12, 40-72.

-----. & -----. (2000). When syntactic theories evolve: Consequences for L2 acquisition research. In J. Archbald (Ed.), *Second Language Acquisition and Linguistic Theory*, 156-186. Oxford: Blackwell.

鈴木孝明 (2007).「単一構文の理解から探る幼児の格助詞発達」『言語研究』, 132, 55-76

Tada, H. (1992). Nominative objects in Japanese, *Journal of Japanese Linguistics*, 14, 91-108.

Takahashi, D. (2008). Quantificational null objects and argument ellipsis. *Linguistic Inquiry*, 39, 307-326.

Ura, H. (2000). *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar.* Oxford: Oxford University Press.

Vainikka, A. & Young-Sholten, M. (1994). Direct access to X-bar theory: Evidence from Korean and Turkish adults learning German. In T. Hoekstra & B. D. Schwartz (Eds.),

Language Acquisition Studies in Generative Grammar, 265-316. Amsterdam: John Benjamins.

-----. & -----. (1996a). Gradual development of L2 phrase structure. *Second Language Research*, 12, 7-39.

-----. & -----. (1996b). The early stages in adult L2 syntax: Additional evidence from Romance speakers. *Second Language Research*, 12, 140-176.

-----. & -----. (2006). The roots of syntax and how they grow: Organic grammar, the basic variety and processability theory. In S. Unsworth, T. Parodi, A. Sorace & M. Young-Scholten (Eds.), *Path of Development in L1 and L2 Acquisition*, 77-106. Amsterdam: John Benjamins.

White, L. (1985). The pro-drop parameter in adult second language acquisition. *Language Learning*, 35, 47-42.

-----. (2003). *Second Language Acquisition and Universal Grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.

Whong-Barr, M. (2006). What transfers? In S. Unsworth, T. Parodi, A. Sorace & M. Young-Scholten (Eds.), *Path of Development in L1 and L2 Acquisition*,187-199. Amsterdam: John Benjamins.

横山正幸 (1991).「幼児はなぜ目的語を格助詞ガで標示するのか」F.C.C.パン・三宅英文・渡辺鉄太・斉藤寿美・島田咲弥 (編)『社会における言語機能の諸相』(pp.144-163). 広島：文化評論出版.

-----. (2008).「文法の獲得 2: 助詞を中心に」小林晴美・佐々木正人 (編)『新・子ども達の言語獲得』, 141-164. 東京：大修館書店.

Yoshimura, N. & Nakayama, M. (2009) Nominative case marking and verbal inflection in Japanese EFL learners. In Y. Otsu (Ed.), *The Proceedings of The Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 359-383. Tokyo: Hituzi Shobo.

付録　主格目的語構文で使用された述語とその数：個人の結果

熟達度	学習者	述語数	述語
初級	KNL02	0	
	KNL01	0	
	KNM01	1	好き
	KNH02	2	いる, ある
	KNH01	4	わかる, 困る, いる, 難しい
	ENL01	1	わかる
	ENM02	2	好き, 大好き
	ENM01	0	
	ENH01	0	
	ENH02	0	
	CNL01	0	
	CNM01	0	
	CNM02	0	
	CNH01	2	ある, 好き
中級	KIL01	1	好き
	KIL02	2	ある, 好き
	KIM01	5	できる, 好き, ある, 欲しい, きにあう(=気に入る)
	KIM02	3	したい(si-ta-i), ある, わかる
	KIM03	5	ある, 好き, ない, 足りない, できる
	KIM06	1	ある
	KIH01	4	怖い, ある, できる, ない
	KIH02	3	できる, ある, 大好き
	KIM04	3	ある, 見やすい(mi-yasu-i), できる
	KIM05	4	ない, できる, ある, 気に入る
	EIL01	1	好き
	EIL02	3	好き, ある, 見える(mi-e-ru)
	EIL04	2	もらえる(mora-e-ru), ある
	EIL05	4	ない, 好き, ある, いる
	EIM04	2	ある, 好き
	EIM05	2	好き, 欲しい
	EIM06	3	ある, 読める(yom-e-ru), 好き
	EIM07	2	ある, わかる
	EIH03	0	
	CIL01	1	好き
	CIL02	3	ある, わかる, 好き
	CIL03	0	
	CIM01	0	
	CIM02	1	ある
	CIM04	2	ある, ない
	CIM05	3	ある, ない, 好き
	CIH01	0	
	CIH02	3	ある, ない, 見える(mi-e-ru)
	CIH03	2	好き, ある

上級	KA01	4	できる, 必要, 心配, 欲しい
	KA02	5	できる, ある, 好き, 得意, ない
	KA03	3	ある, できる, ない
	KA04	6	ある, いい, ない, わかる, 好き, いる
	KA05	6	ない, ある, 似合う, できる, したい(si-tai), 好き
	KA06	3	ある, ない, できる
	KAH01	5	できる, ある, ない, 大好き, 取れる(tor-e-ru)
	KAH02	6	できる, ない, 好き, 知りたい(siri-ta-i), ある, 必要
	KAH03	2	ある, 習いたい(narai-ta-i)
	KAH04	9	ない, 聞きとれる(kikitor-e-ru), 見たい(mi-ta-i), できる, わかる, 好き, ある, 嫌い, いる
	EA02	0	
	EA01	1	ある
	EA03	4	好き, ある, できる, わかる
	EAH01	2	好き, 売りたい(uri-ta-i)
	EAH02	3	好き, ある, 嫌い
	EAH03	2	必要, できる
	EAH06	3	できる, 欲しい, 怖い
	EAH07	4	大好き, 好き, できる, わかる
	EAH08	3	ない, 好き, できる
	EAH09	2	好き, ある
	CA01	1	好き
	CA02	0	
	CA03	1	ある
	CAH01	0	
	CAH02	2	好き, 大好き
	CAH03	1	得意
	CAH04	4	ある, 好き, 欲しい, ない
	CAH05	3	いる, ある, できる
	CAH06	2	ある, できる
	CAH07	4	できる, ある, 好き, いや

注. K: L1韓国語，E: L1英語，C: L1中国語; N: 初級，I: 中級，A: 上級; L: 低，M: 中，H: 高
下線部は各熟達レベルでの新出述語 (非状態述語を含む複合述語のみハイフン表記)。